

龍谷大学『世界仏教文化研究論叢』第六一集抜刷
令和五年三月一二日発行

上田天瑞と上田閑照

——ビルマと横浜の家族史——

大澤 広嗣

上田天瑞と上田閑照

——ビルマと横浜の家族史

一 ある学者家族の景色

「父は一年中ほとんどいなかたわけだが、不思議に、淋しいとは思わなかつた^①」。長男は、少年時代の記憶をたどっていた。

一家の父親は、上田天瑞（一八九九～一九七四）^②といい、高野山大学の教授で、高野山真言宗の僧侶でもあつた。追想文を記したのは、長男の上田閑照（一九二六～二〇一九）。京都大学の教授を務めた哲学者である。

天瑞が、住職を務めていた寺院は、横浜にあつた。遠く和歌山にある大学で教鞭をとるため、寺を空けることが常であつた。長期の休暇は戻つたが、その間は、妻と子供達が寺を守つた。更に戦時中の天瑞は、ビルマ（現・ミャンマー）へ軍務と留学に赴き、長きにわたり家族（^③）は離れた。

これまで筆者は、天瑞がビルマで従軍した宗教宣撫工作について研究を重ねてきた。当人がビルマで記録した日記が、近年に遺族の尽力で見られて、それを元に筆者は軍高官と連携した現地での宗教対策について明らかにした^④。この日記は、実に興味深い。戦争により国外留学が限られた中で、海外で学問を行った人物であり、しかも留学中にはビルマで出家したからである。天瑞の日記は、①大学教授の仏教学者、②陸軍嘱託、③大乘仏教僧侶、④上座仏教僧侶として、さらには、妻には⑤夫、子供達には⑥父、という計六つの立場から思いを綴つたものである。



図1 上田家の集合写真。1944（昭和19）年7月に横浜で撮影。後列左から長男閑照（第一高等学校生）、三男三郎（神奈川県立横浜第一中学校生、後・瑞風）、次男二郎（海軍兵学校生、後・樫本高明）、前列左から母佳津子、ビルマから帰還した父天瑞。四男修也は翌年に生まれる。写真下部は経年退色による（遺族提供）。

の親子関係を基軸とした、宗教・哲学の学問史として位置付けて論じたい。

本論の構成は、二部に分かれる。前半は、閑照が誕生した一九二六（大正一五／昭和元）年を起点に、昭和前期の上田家の歴史について長男の閑照を中心に振り返る。後半は、父天瑞がビルマで記した日記における閑照など家族に関する記述の抽出と分析を試みるものである。

二 東京から平塚まで

（1）父の東京での学究生活

父の上田天瑞は、岡山県阿哲郡豊永村（現・新見市）に生まれた。生家は農業を営んでいたが、近隣の真言宗高野派（現・高野山真言宗）三尾寺で僧侶となり、高野山中学校を経て、高野山大学に学ぶ。更には、宗派内で選抜されて、東京帝国大学に進学し、文学部印度哲学科に学び、パーリ語仏典に基づき戒律を研究するのである（図2）⁵。在学中には、三尾寺の養女池田きく（後・佳津子）を妻とした。

日記の内容は、ビルマと日本で離れて暮らす、上田家のファミリーヒストリーである。戦後に天瑞は、日記での記述をもとにビルマでの活動を再構成して公刊したが、歴史的な記録が意図にあり、家族のことは必要以上に書いていない。

と、ここまで読んで、気になる点はないか。天瑞の人物像とは。そして日記での閑照に関する記述とは。後年に哲学者となる閑照について、青年時代を明らかにすることは、学問形成を考える上で意義がある。それは閑照が、成人までの経過は限られた文章でしか記録していないからである⁴。そこで本論は、天瑞と閑照



上田天瑞と上田閑照

図2 東京帝国大学の印度哲学関係者の集合写真。列外上部の左3人目は島地大等。後列左から多良龍童、未詳、上田天瑞、未詳、田中於菟弥、結城令聞、三沢智雄。前列左から、未詳、木村泰賢、常盤大定、高楠順次郎、長井真琴、藤田真道。撮影日不明（遺族提供）。

父が帝大生であった一九二六（大正一五）年一月一七日に、長男の上田閑照が生まれた。閑照は、「前日の一月十六日、ひどく寒い日、大きな樽に田舎風の漬物をつける仕事の最中に陣痛が起こり……私が生まれた」と記している。天瑞は、親しい学友とともに、「閑照」と命名したが、母は、生まれたばかりの赤子が難しい名前ではかわいそうだと云ったが受け入れられず、考慮の末に「しずてる」の読み方を編み出し、翌日に天瑞を説得して、読み方を改めさせた。^⑦

閑照は、自著の略歴には東京生まれとだけ記し、詳しい地名を書いていない。遺族に尋ねたところ、誕生の地は、東京府北豊島郡三河島町大字町屋一四番地（現・東京都荒川区町屋四丁目一三番付近）という。隅田川沿いの低地に位置する町屋は、天瑞が通う台地上の本郷の東京帝大へは少し離れているが、徒歩で行ける範囲である。閑照が、三河島の生まれと記載しなかったのは、乳児のため記憶がないからだ。

当時の三河島町の地勢を見よう。人口について、一九〇六（明治三九）年は二五九〇人で、その二〇年後の閑照が生まれた一九二六（大正一五）年は、六万四九六一人であった。^⑧ 急激な人口増加が起きた地域であることが分かる。一九二三年の関東大震災後に、被災した東京市内の住民は郊外に簡易住宅を建てて移り住んだが、三河島町も「忽ちにして田を埋め畑をならして建つて行つた」という。^⑨ 学生である天瑞夫婦にとって、三河島の寓居は、奨学金の範囲で住める場所であった。

天瑞は、卒業論文「戒律の研究」を提出して、一九二七（昭和二）年三月に卒業した。同期は、上田のほか、阿部国治、太田悌蔵、戸田泰学、成田昌信、望月四郎、結城令聞の計七名であった。¹⁰ なお同年をもって、主任教授である高楠順次郎が定年により退官している（図2）。

（2）平塚の芳盛寺

上田天瑞は、東京帝大を卒業した一九二七（昭和二）年に、神奈川県中郡土屋村（現・平塚市）にある古義真言宗の芳盛寺の住職となった。ようやく普山できた寺である。この年の八月に、天瑞夫婦の次男である二郎（後・榎本高明）が生まれている。

湘南の穏やかな海岸線から離れた丘陵地帯に、寺があつた。芳盛寺は歴史が古い。鎌倉幕府の成立に関わつた土屋三郎宗遠が、臨済宗高僧の退耕行勇を開山の和尚に、自分の菩提寺として建仁四年（一二〇四）に建てた阿弥陀寺に始まる。応永二年（一四一六）に起きた上杉禅秀の乱の後に足利氏憲に味方した土屋一族は領地を取り上げられ、新たな領主となつた大森式部大輔芳盛が、菩提寺となして寺号を芳盛寺と改めたといふ。¹¹

天瑞は、引き続き東京帝大の大学院に在籍した。平日は、東京にて研究と『国訳一切経』（大東出版社）の刊行を手伝い、週末だけ自坊に戻り、家族と共に過ごす生活をしていった。閑照は、この頃の記憶はあるようで、寺の「広い庭の一角に聳える銀杏の大木のもとで村の子どもと遊び暮らした。秋になって銀杏の葉が散りはじめ、やがて庭一面、黄金色に柔らかく散り敷いた自然の絨毯のうえで遊びまわつた」と記す。¹² 銀杏の木は、いまでも境内にある。

三 港町の横浜

（1）本牧の真福寺

上田天瑞は、一九三二（昭和七）年に、神奈川県横浜市中区本牧町にある真福寺の住職に転ずる。¹³ 上田閑照にとって、横浜は人生史において重要な意味を持つ土地となる。

閑照によれば、「小学校にあがる年齢に近づいた頃、父母は子どもたちをつれて横浜に移り住んだ。住いは本牧の三溪園の近く。普通の家だ

が仏間¹⁴がある寺であった。三溪園とは、製糸や生糸の貿易を手掛けた実業家の原三溪が、一九〇六（明治三九）年に設けた広大な日本庭園である。園は海沿いの台地にあり、すぐ下に海岸線が迫っていたが、戦後に埋立地が造成され、水辺が覆われた。

真福寺は、本尊を阿弥陀仏とし、慶安四年（一六五二）に長辨の開基により、当人の生家である岩崎家の菩提寺として創建したとされる。ただし寛永一〇年（一六三三）の文書には既に横浜の宝生寺の末寺で、別の史料では生没年不詳の道音が開山とあるなど、寺の縁起は詳らかではないが、正徳六年（一七二六）に慈印が中興したという。明治初年は、本牧にある東福院が兼務しており、住職は常駐せず檀家がいなかった。明治七（一八七四）年に横浜増徳院の末寺となり、一九二六（大正十五）年に改めて高野山金剛峯寺の直末となり、一九三一（昭和六）年当時で檀家は五戸という小さな寺であった。¹⁵

（2）横浜市立間門尋常小学校

上田閑照は、一九三二（昭和七）年に、真福寺近くの間門尋常小学校に入る。しかし天瑞の高野山大学助教授の就任により、閑照が二年生の時に、一家は高野山へ転居する。閑照が五年生の夏休みの時に、両親は子供達の教育を考えて、母子だけは横浜の真福寺に戻った。

生活環境の変化は、閑照に強い印象を与えた。閑照は、再び横浜に住んだ当初に、和歌山の方言のため級友たちとの会話が通じなかったが、「一月ほど経ったとき、突然浜っ子の言葉が甦り、自由に級友たちと話せるようになった。同時に高野弁を完全に忘れてしまった。言葉に関するこのことは、一生のうちに経験したいくつかの不思議なことの一つ¹⁶」と記す。



図3 上田閑照が通った間門尋常小学校での恩師である教諭の柏貞二

間門尋常小学校は、外国との往来が盛んな土地柄ゆえに先進的な教育を行っていたところである。¹⁷「生い立ちの記」には、五年生と六年生の担任教諭である「カバ先生」こと柏の名前を挙げている。文中で詳しい氏名を記載していないが、一九三〇年から同校に勤務していた柏貞二のことである（図3¹⁸）。閑照は、休日には柏宅へ友人と遊びに行き、奥方から菓子をもらい勉強を教わっていた。「遊びながら、先生を偉い先生として尊敬していた¹⁹」と書く。その後に、閑照は、研究者ではあるが、教育者にもなったので、その教育の理想像の一つにしたのかもしれない。後述のように、天瑞のビ

ルマ出発時には見送りに駆け付け、柏とは家族ぐるみの付き合いをした。後に柏は、一九四二年八月から近隣の横浜市根岸国民小学校の校長となつて⁽²⁰⁾いる。

閑照の小学校での親友が、「生い立ちの記」にある「欣ちゃん」こと、佐藤欣也である⁽²¹⁾。外国文化が漂う港町での成長が、やがて閑照が世界に目を向ける扉となつたのである。

(3) 神奈川県立横浜第一中学校

上田閑照は、一九三八（昭和一三）年に、神奈川県立横浜第一中学校（略称・神中^{じんちゆう}）へ進学する。男子生徒のみの五年制であつた。同校は一八九七（明治三〇）年に神奈川県尋常中学校として創設され、閑照のころは横浜市西区の高台にあつたが、戦災で焼失して、戦後の学制変更を経て同市旭区に移転して県立希望ヶ丘高等学校となつた。開校以来、諸分野で活動する有為の人材を輩出している。

確認できる資料によれば、閑照は、入学直後には一年一組の仮正組長に任命され、二年一組では副組長となつた⁽²²⁾。勉学に取り組み、剣道部を経て蹴球部に属し、時局の影響で野外教練に参加するなど、青春時代を過ごした。親友の佐藤欣也も同校に進学して、後には柔道部の主将を務めた。閑照が三年生の時には、弟の二郎が一年生で入学する。

閑照は、「生い立ちの記」で、授業を受けた教員の名前を列挙している。あだ名の教員を記すなか、唯一の実名を上げていたのが二年間にわたり国語を習つた犬養孝（一九〇七～一九九八）のみである⁽²³⁾。犬養は、東京帝大を卒業後、一九三二（昭和七）年から一九四一年まで神中の教諭を務める。その後は、植民地台湾の台北高、大阪高を経て、戦後は大阪大、甲南女子大で教えた。万葉集研究が著名である犬養は、当時を振り返っている。

そのころの生徒さんはいまは、官界・学界・財界各方面のリーダーとなつて活躍しておられます……。／わたくしと教室を共にした昔の生徒さんたちは、国語の予習のことは、いつまでも忘れられないところでしょう。……辞書も漢和大典・大言海・広辞苑・百科辞書といったもので、筆者からテキストから作品まで徹底的にしらべて、しらべなければ、教室にはいれないことでした。……そのころの生徒さん、諸君、各方面で活躍されながら、国語の力のゆたかなこと、日本のことばへの愛着の深さは、おそらく人後におちないものがある

ことでしょう。⁽²⁴⁾

犬養の授業の進め方には、特徴があった。生徒には辞書から徹底的に予習をさせて、言葉への理解を深めさせることであった。後に閑照が、言語に対して鋭い感覚を持ち得たのは、犬養からの授業の影響が要因の一つであったろう。

「生い立ちの記」で、犬養に次いで記した他の神中教員は、あだ名のみである。当時の旧制中学の生徒の多くは、教諭をニックネームで呼ぶカルチャーがあった。閑照は、「スケカン」の英語にしても、「青ちゃん」の漢文にしても、その他の先生方の授業も充実した高度なものであった⁽²⁵⁾と記す。閑照は「あだ名だけ覚えている先生がほとんどである」と断っていたのは、卒業から長い年月が経過していたのでやむを得ない。同稿でのあだ名のみで教員について、筆者が卒業生の証言録や教員名簿から確認したところ、次のとおり判明した。

英語の「スケカン」は小宅歆一、漢文の「青ちゃん」は長野正義、図工の「トバケン」は鳥羽宗雄、化学の「クマソ」は吉原洲三、体育の「ゴリボン」は高田（星野）佐十郎で「シロボン」は丸山保彦である。⁽²⁷⁾あだ名は先輩から引き継がれ、更に後輩に伝わるが変化もする。髭に特徴があった「クマソ」こと吉原は、閑照の後輩からは「スターリン」とよばれた。⁽²⁸⁾

実名とあだ名で記した教員の順序が、閑照の学問形成を考える上で重要である。国語、英語、漢文という言葉に関わる教員が最上位だからである。その中でも、あだ名で示した教員のうち、「スケカン」こと小宅歆一を筆頭に挙げたのは、授業が印象に残っていたからである。

小宅は、一九二七（昭和二）年から一九四五年まで神中に在職した。前任校は京都府立京都第一中学校（略称・京一中）で、京都帝国大学の近くに位置した。⁽²⁹⁾小宅は、京一中の機関誌に論文「翻訳と時代」を寄せるなど、アカデミックな姿勢を見せていた。⁽³⁰⁾一方で、趣味人としてバイオリンを嗜み、京一中が一九二〇（大正九）年に創立五〇周年を迎えた際には、記念式典の式歌作曲し校歌の編曲も手掛けた。⁽³¹⁾異動後の神中ではマンドリン部の創設に関わったなど、音楽の知識があった。小宅は、学究肌で教養豊かな人物であると窺い知る。小宅の授業を通じて、京都の学問と文化の香りを、閑照はほのかに感じていただろう。後年に同地で学問を志す、伏線の一つであったに違いない。

神中には、仏教関係の教員がいた。四年時の一九四一（昭和一六）年から第六代校長を務めた菊地竜道は、新潟県三条出身で、曹洞宗の奨学生として東京帝大の英文で学んだ人物である。⁽³²⁾菊地は後に、都立日比谷高を経て駒場東邦高の校長となった。閑照のエッセイ「なぐられた話」には、漢文と剣道を教えていた原田大作とのエピソードを紹介する。⁽³³⁾この名前は俗名だったようで、原田霊照といい、青年時代は京都の知

恩院で過ごした浄土宗僧侶であった。⁽³⁴⁾

閑照は、一九四三（昭和一八）年三月に神中を第四三期生（全一八二名）として卒業する。⁽³⁵⁾ 同年四月に東京の第一高等学校へ進む。

四 父天瑞のビルマ留学

(1) 経緯

上田天瑞は、戦時中にビルマで出家して、上座仏教の僧侶になったという類例なき経験を送った人物である。当初は予定していなかった、ビルマへの入域は、次なる経過をたどった。

天瑞は、一九四一（昭和一六）年に、高野山大学の在外研究員としてタイに派遣された。同地を足掛かりにして、仏教の戒律を研究すべくインドとセイロンに向かうことになっていた。しかし同年一月八日にバンコクで開戦を迎える。インド等を統治するイギリスを含めた連合国側に対して、日本は戦争を仕掛けたのである。既にフランス領インドシナに武力を駐屯させていた日本は、マレー半島に上陸するとともに、さまざま独立国のタイと軍事協定を結び同地に軍隊を移駐させた。

日本軍は、英領ビルマの攻略準備を行っていた。ビルマで多数派の宗教とは何か。それは、仏教である。開戦前から参謀本部は作戦立案にしていたが、僧侶からなる宗教宣撫班を編成して備えたのである。宗教宣撫班は、開戦後にバンコクへ進むが、同地で留学していた天瑞に、班への参加が依頼される。開戦となり、留学予定地の英領のインドやセイロンに向かうことが不可能となった今、この機を逃すと所期の目的のもの逃す恐れがあった。南方仏教の戒律研究のため現地での出家を念頭に入れて、天瑞は宣撫班と共にビルマへ向かうことを決断する。

天瑞は、ビルマへの侵攻後、民衆への宣撫工作として、日本の理念を伝えるビラの散布、食料の配給、高僧らへの懐柔などに関わる。帝国陸軍第一五軍は、ランゲーン（現・ヤンゴン）の占領後に、軍政部の直轄として蘭貢日本語学校を設置して、天瑞は校長となる。人々への教育に従事して、熱心に職務に取り組んだ。ビルマの「独立」後は、研究に専念すべく、一九四三年二月一七日にスエジン派の僧院で「ウ・ワジラブデイー」（雷智）として出家を果たし、戒律研究のため、学僧に師事して念願の留学を遂げるのである。

日本出発から南方留学を経て、帰国までの行状を、天瑞は日記に残していた。日記は、全一一巻で構成すると思われるが、現在まで第八巻

と第一二巻は未発見のままであり、由来は別稿で論じた。⁽³⁶⁾

(2) 出発と現地情勢

上田天瑞が、ビルマで記した日記の文章からは、人物像が見えてくる。愛妻家で、子煩悩だが、時に厳しい父親像である。日記の原本には、上田家の関わることは赤色の波状の傍線を付してあり、恐らく上田閑照が付したものであろう。本日記からの抄出に際して、参考とした。

日記の冒頭は、横浜駅での出立の場面である。「午後五時夕食。隣組に挨拶す。……家族全員駅まで見送り。……一同ホームに入る。八時十七分、三十九分共に二等席満員。……三十分の頃間門小学校の柏先生息せき切つて走り来り見送る。満員の為止むなく東京に行き東京にて乗車することにし上京す。一同とホームにて別れる。……日曜として活動を控へた土曜日の夜のこととし汽車は超満員。約五十分待ち十時十分発の汽車に漸く乗車す」(二九四一〈昭和一六〉年一月一日、見出し「横浜出発」とある。子供達が通学した小学校の教諭の柏貞之が見送りに来た。閑照が敬愛した「カバ先生」である。なお、見出しは日記の要所に付けられている。

天瑞は、京都駅で途中下車して東寺や、和歌山の高野山に挨拶を行い、客船の出港地である神戸に行く。妻佳津子と三男の三郎は、後から神戸へ向かう。「九時前佳津子三郎と共に買物に出る。……沖に碇泊中の船(バタビヤ丸、四千四万噸)に乗り込み水上警察から……取り調べを受ける。……見送人 名越有全、全寿賀子、吉田脩二一家、上田皓造、上田宥澄(天瑞の弟——以下の亀甲括弧は引用者による補足)夫妻、中山敏子姉妹、参事橋次郎夫人、全上伊藤氏、久保田真源(校友会)、報国校務隊学生一〇人(家近、麻生、鳴見)、滑瑞宝、庄野真澄主事、坂口密翁(はるばる京都よりはせ来る)、安藤仁泰/(上田)佳津子、三郎」(同年一月六日)とある。

長い航路の末、一月二三日にバンコクにて到着した天瑞は、旅装を解く。開戦前夜の緊張感があるなか、つかの間の現地滞在を楽しむ。「映画を見に行く。……若い夫人がキラビヤカにかざり賑かに語つてゐるのを見ると何か浮いた世界の様な感じがして不安定を感じる。蓋しこれが人生の眞の姿か。思ふと故国の自分の家庭にはせ比較して我が妻の余りにも気の毒にも思ふと共に又この上もなく貴く感ぜられる」(同年一月二九日)とある。劇場にいた女性と自分の妻を重ね合わせていた。

遂に迎えた二月八日の開戦。天瑞は家族を心配する。「我が家族は如何にして居るであらうか。恐らく一同我がことを心配しつつ一生懸命

の覚悟で一家協力互に助け国難に当る決意をして居る事であらう。当分は通信も望めない。蓋し今日のラヂオに皇軍が平和裡にバンコックに入城した事を聞き安心してをる事であらう」(同年二月一〇日)と記す。開戦後、日本とタイは協定により、タイ領内に武力進駐したのである。

日泰同盟条約の締結の様子は、東京とバンコックで中継があった。その放送を日本の家族が聞いているだろうと想像する。「食後前の氏の家にラヂオを聞きに行く。今日からついた由。丁度、日泰同盟の記念放送が東京とバンコック間にあり。君が代、泰国歌、東条首相、ピブン首相の挨拶がある。なかなかよく聞へた。丁度、日本の九時から、こちらの七時からだ。今は横浜のウチでも家族が皆同じ様に聞いてゐるだらうと思ふとなんだかなつかしくなつた」(同年二月二三日)のである。

海外での年越しは、天瑞を感傷的にさせた。「正月が来ると云ふ感は更にせず。故国の家では小生のことを心配しつつ年を送りつつあることと思ふ」(同年二月三一日)という。

そして、明けた一九四二(昭和一七)年。「紀元二千六百二年! この年こそ我が日本にとつて誠に史上未曾有の年たるべきものであるが我は海外万里。生れて始「初」めて全く一人での正月を迎へた。我が妻我が子と離れて正月を迎へることはこれが初めてである。我が家には今日我に雑煮の陰膳をすえ、母子四人我を偲びつつ、つつましく正月を迎へて居ることであらう。彼等を偲ぶこと切なり。蓋れども我は「普通の人となさざることをなすべき」事に駆られて居る使命といふべきや幸福といふべきや。大苦惱といふべきや。やせ我慢と言ふべきや。未だに未だに、我れこの事を果すことは。我が愚にして無施。何をもつてかこの念願を果たすべきや。自ら我地に訪ずる外にその道なきや」(一九四二年一月一日、見出し「拝賀式」とある。

家族が自分を心配していることに思いを巡らす。「四時半にチョウン(人名)の室へ日本ニュースを聞きに行く。昨夜のバンコック爆撃を放送してゐる。五機で来て一機トンプリ(地区)に落とされたらしい。家族達は心配してゐるだらう」(同年一月二五日、見出し「南泰殉難者四十九日忌」とある。

(3) 手紙の往来

ビルマ日記には、妻の佳津子に手紙を出したとの記述が、多数出てくる。その記述から、妻を思う姿勢が見えてくる。戦時下のため、来信の

頻度が不定期であるため、待ち望んでいる様子を窺い知る。「久しぶりで妻の手紙を出して読んで見た。十一月廿七日づけである。既に二ヶ月半一片の音信を得ぬ。何んとなしに急に涙が出て来て一人で泣く」(一九四二〔昭和十七〕年二月一〇日)とある。そして、「実に久しぶりの家庭よりの通信。サムラー(人力三輪車)の上で封を切りむさぼる如くに読む。昨年十一月廿日の電報以来十二月廿九日まで全くこちらからの通信も行かず、非常に心配してゐた所へ十二月廿九日三通一度に着いたそうだが妻や子達の喜びが目に見える様である。朝は夕に至ることなく我が身を案じ子供達の教育に全力を会せる我が妻に感謝せざるを得ない。二郎が兄弟を代表して手紙を書いてくれて居る。余白に三郎書して曰く、／やがて行きます。(無銭乗船でもして、此の間の帝大生のやうに)／お父さん、がんばれ 三郎／と、実にほほえましく一人で笑ふ」(同年二月一七日)とある。

注目すべきは、日記で、上田家の兄弟が可愛がっていた、飼い猫を記述していることである。もし日記が、本人の備忘録であれば、猫の名前だけであるうが、第三者にも分かりやすいように、補足のため「猫」と書いてあることから、この日記は読まれることを想定して記述している。「佳津子より十六日付けの手紙来り。見ると余り元氣のない手紙。午睡もなし。十三日に彼等の最も可愛がりしフーヤ(猫)が何物かにかまれて死んだ由。一家泣いてゐるとの事。あれ程に愛らしき猫と一家中で可愛がりしフーヤが知らぬ間にかみ殺されたとは如何に彼等が悲しみや同情に堪えず。我の出発前に我が代りと冗談を言ひつつも蓋しこの子猫が死んだら、不吉と云へば実に不吉である。又小生も常に肌身を離さぬ御守が数日前からどうしても見つからぬ。これもかつげ〔担げ〕は不吉である。蓋しフーヤは我が身代りとなりて我を守るものならん。御守体も正しく身代りとなりしものか。寺中の僧に〔弘法〕大師の御守を一枚与へしをわけを話して通してもらひそれに泰の御守二個を添へて御守の代(かわり)は出来た。フーヤは代をもらふ様に言つてやらう。我が身は万善なることを信じて疑はず。只我が妻が曩むかしに子が悲しむことのみ同情に堪えぬ」(同年二月二〇日)という。

この後、陸軍の宗教宣撫班の囑託として、タイからビルマに入域して、宣撫工作を実施する。占領後に設置した蘭貢日本語学校の校長にあつたある日のこと、長らく途絶えていた家族からの手紙が来る。「帰つて見ると佳津子より手紙が二通来てゐる。早速よんだが、この手紙は三月五日附と三月三十日附である。既に二ヶ月前に三月九日のを受け取り一ヶ月以上前に三月十四日附と三月十九日附をよんでゐる。まるで歴史の隙は前後混乱した様な珍現象何んだか変である。戦争は何もかにも変つてしまひどんな奇蹟でも生み出す。時間を前後に取り控へることさへす

るのである。改めて此來の手紙を出し、順を追うてよむ。妻は三人の中学生をかかへて奮闘してゐる。小生は悪い夫ではある。これも止むに止まれぬ到行〔至行〕である。我も暇ある毎に思ふ所は妻子の事である。共に健在にして帰朝の日相会するを楽しみひたすらに祈るのみ」(同年八月三日)とある。さらに、「佳津子より手紙来り中に子供三人の写真が這入つて居つた。仲々立派な青年である。頼もしい感である。学校の成績も皆相当である由」(同年九月三〇日)とあり、子供を期待する親心が窺える。

五 長男閑照の第一高等学校の入試

(1) 最初の受験

上田閑照にとつて、高校受験は人生史で重要な岐路であつた。京大教授の時に、学生に対して次のように語っていた。当時の受講生は、この時の模様を回想している。

院生のゼミの打ち上げの食事会のことです。その際、上田先生は、自分は人生の中で本当に一生懸命に勉強をしたときが三度あるといわれました。一度目は、旧制一高の入学試験のとき。次はドイツのマルブルクで博士論文を書いたとき。……三度目はいつかということそれは「今」だと言われるのです。過去形でなく、現在形で今、真剣に勉強をしていると、学生を目の前にしていえるのはよほどのことです。⁽³⁷⁾

つまり、勉強をする姿勢は、中学時代も教授時代も同じであつたのである。それは、高校受験は、単なる学歴のパスのためではない。青年期から学問への志向があつたからである。この点は後述する。

前節で紹介した日記の時間軸から、少し戻る。天瑞は、閑照の受験を次のように見ていた。天瑞と宗教宣撫班らはタイを出発して、一九四二(昭和一七)年三月一三日にはランゲーンに到着する。軍事作戦に伴つた宣撫工作に関わるが、天瑞は受験勉強の只中にある閑照を案じる。

「今日は既に三月廿二日だ。閑照の入学試験は如何になりしや。既に終わつて結果も発表になつて居るかも知れぬ。三郎も決定して居つたろう。小生の遠くビルマにある事を家族は知るや否や。六月頃までは結果を知る由もないであらう。妻の労苦相すまぬ次第である」(一九四二年三月二二日)とある。

「故国では既に桜の候である。吾が家の庭の桜は今満開であらう。故国をはなるる四千五百哩。灼熱の地ビルマにありては桜の気分は感ぜられぬ。閑照の入試は如何になりしや。三郎は既に中学に入学して居るであらう。何事も確実に知る由はない。たゞ彼等の健在を祈るのみ」(同年四月三日) という。

当時の中学校は五年制であったが、高校入試は四年次から挑むことができた。しかし閑照は、四年生で受けた第一高等学校の試験に、残念ながら通過できなかった。

「日本の新聞を見た。学校の試験は三月一、二日だった由。閑照は如何か。新聞を探しても入学者の氏名を出したのはない」(同年五月二日) とある。その後、「軍政部より帰つて来ると佳津子より手紙が来てゐると坂本君が云ふ。大急ぎで自分の室に走つてあわてて開封する。思ひがけなく早く家よりの通信を得た。……三月九日附である。一同無事の由。丁度、三郎の入試で忙がしいらしい。閑照はどうも見込み少ないらしい。〔三月〕十一日が発表の由。久しくあきらめてゐると音信を得て何んとなく愉快である」(同年五月一四日) とある。

ついに、「夕食時に佳津子より手紙二通来る。……故国を数千哩去つて最も嬉しいものは故国の音信である。閑照は第一次には採つたが駄目だった由。おいしい。ウチの庭の桜の〔押し〕花を入れてある。丁度、桜の咲き初〔始〕める三月二十七日に一通は出して居る。……三郎は〔小学校を〕総代で卒業。神中に入學し二郎も進級。我が子は三人中学に行つて居る。おそろしく頼もしい限りである。我が妻の勞苦思ふだに有難い。彼等の健康を日々に祈つてやまぬ」(同年五月二〇日) という。

(2) 二度目の受験

閑照は、神中の五年生に進級して、一高の受験に再び挑む。天瑞は、ラングーンの歴史ある寺院へ祈願する。「この頃閑照の入学試験合格を祈る為、一週間スエーダゴンパゴダに日参する。朝早く、真言を操りながら参る。彼と母の一生懸命の念願をかなへさせてやり度いと心より祈る。我が真珠の靈力によつて合格出来そうに思ふ。試験は目前に迫つて居る。この六日七日である。……常に我が念願を往来離れざるものは我が妻我が子のことどもである。この思ひは今の我にとりては最も楽しい思ひである。よき妻よき子のことのみ思ひ出されるのもおかしい。堅く無事大任を果して相会する日を期待すること絶大である」(一九四三〔昭和一八〕年三月四日) とある。

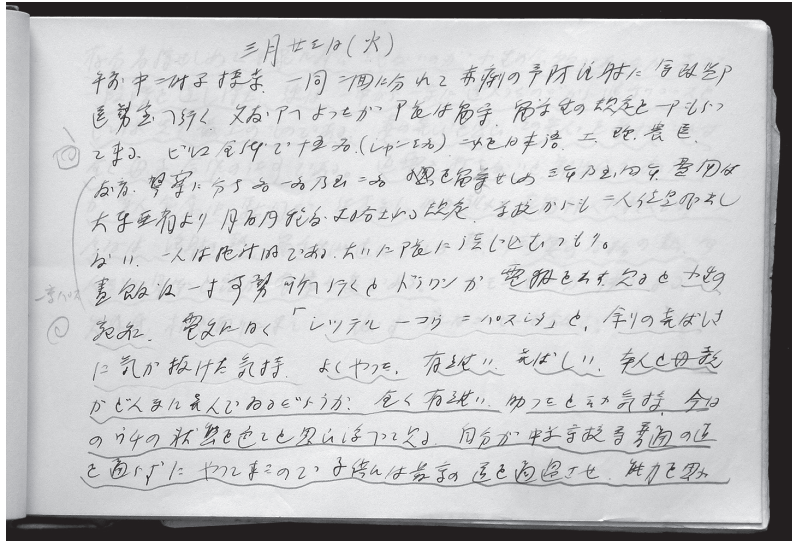


図4 1943（昭和18）年3月23日付けの上田天瑞の日記。波状の傍線は、後年に上田閑照が付したものとと思われる（遺族提供）。

奇跡をもたらすという「真珠」は日記の所々に出てくる。後年に天瑞は、一九四三年にビルマにて宗教上の不思議な体験をしたと記す³⁸。遺族によると、天瑞は師僧の金山穆韶から授けられた教えに従い、ビルマ滞在中も真言密教の修法をしていたが、一九四三年一月六日に、ふと気が付くと財布の中に真珠が入っていたという。これは、仏法の力によって授けられたものに違いないと堅く信じ、以後は大事に護持してきたとのことである。

そして、「愈々明日六日が閑照の入学試験である。何んとしても祈願を成就させてやり度い。この心で一杯である。我が家に於ける本人と母の一生懸命の姿は如何ならんと想像する。明日は六日である。六日は妻の生れた日である。我が奇蹟真珠の出現した日である。これは必ず合格すると思はれて何んだか嬉しくなる。必ず合格してくれ。必ず合格するだろう」（同年三月五日）と念ずる。

「今日は正しく閑照の一高入学試験である。本日七時半（ビルマ時間五時）に起きる。未だ暗い。試験の始る頃と思ふ八時に我が如意宝珠（前述の真珠）を出し至心に祈る。今日は六日である。必ず這入れるであらう。八時過ぎからシュエーダゴン（パゴダ）に真言を念じつつ参り至心に祈る。夕方も参る。何んとしても彼と母の念願を叶へてやり度い」（同年三月六日）とある。父の願いは届いたのか。果たして。

天瑞は、ついに閑照の合格の知らせを聞く。「昼飯後、一寸事務所へ行くとドラワンが電報を出す。見ると小生の宛名。電文に曰く「シツテル 一コウ ニ パス シタ」（閑照一高にパスした）と。余りの喜ばしさに気が抜けた氣持。よくやつた。

有難い。喜ばしい。本人と母親がどんなに喜んでゐるだろうか。全く有難い。助つたと云ふ気持。今はウチの状態を色々と思ひ浮かべて見る。自分が中学高校等普通の道を通らずにやつて来たので子供には最高の道を通過ぎさせ、能力を思ふ存分發揮せしめて国家に奉公させ度いのが小生の念願であつたが先づ一段落を達し得た。彼は〔横浜〕一中から一高に這入つたのだから、進学のコースとしては先づ最上のものである。妻の喜びを思ひ、その苦心を案ずる。これは全く母子合作の仕事である。返電を打ち度いと郵便局で相談したが軍人軍属は駄目だ。仕方なし明日誰れか居留邦人に頼んでみよう。今日は注射の熱、〔南方特別〕留学生派遣についての熱、閑照の合格の熱。何んだか身体と頭が非常に變である」(同年三月二三日、図4)という。文中の「国家に奉仕」は、重要なポイントなので詳細は後述する。

父の喜びは最上で、複数の同僚と分かち合う。「夕飯に閑照入学祝のつもりで久しぶりに酒杯を傾けるは酒三升をあける。実に愉快に又元氣よくおそくまで談じ人生や教育、さては大東亜の建設につき論談する」(同年四月五日)という。天瑞は、閑照が「大東亜」の将来を担う人物になることを期待していたのである。

(3) 入学後の進路

天瑞が、特に目に掛けている青年がいた。校長を務めるラングーン日本語学校にいた、ある生徒である。「今日は」と云つて来る者がある。誰かと思ふとモンテットンである。遊びに来たと言ふ。色々話す。年を委はしく聞くと昭和元(一九二六)年七月の生であるから日本流にして十八。小生の子供閑照より半年若いわけ。自分の子供の様なものである。蓋し人物、智識とても閑照が及ばぬ様に思ふ。誇らしく立派な青年であると思ふ。学校では小学校中学校いつも一番若かつた。ハイスクールを十五で卒業。カレッヂを直ぐ這入れぬので一年待つた由。なか／＼の秀才である。小生の最上の弟子である」(一九四三年三月六日)とある。我が子への評価が厳しいのは、父親の愛情ゆゑであらうか。

このモンテットン (Maung Thet Tun、図5) は、日本政府による南方特別留學生の第一期生として広島高等師範学校と京都帝国大学法学部に学び、終戦後は一九四五年九月に帰国するが、イギリスに留学して、後に世界銀行のビルマ代表、ユネスコのアジア局長を務めた。⁽³⁹⁾

閑照は、一高に入学する。「佳津子……より航空便の通信来る。閑照の入学準備に忙殺中とある。大騒ぎをして一生懸命にやつてゐる母親の姿が目に見える」(一九四三年四月二〇日)とある。



図5 ランゲーンでの上田天瑞とモンテットン。後者による日本留学直前の記念撮影(遺族提供)。

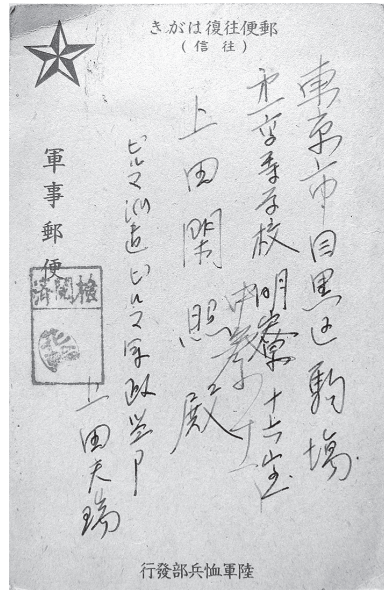
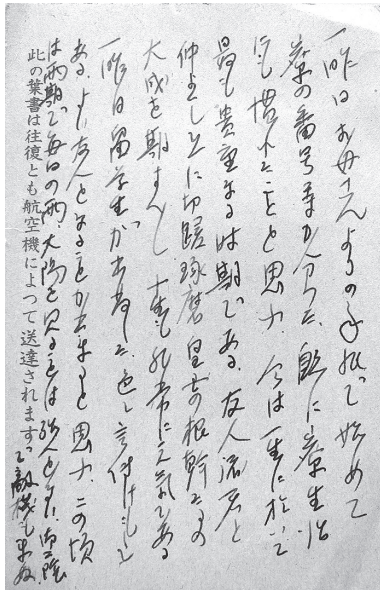


図6 1943(昭和18)年4月以降に発出された、上田天瑞(ビルマ派遣ビルマ軍政監部)から上田閑照(東京の第一高等学校の寄宿舎中寮)への軍事郵便の葉書(遺族提供)

しかし、父と子の思いはすれ違ふ。「家族より手紙」二通来る。……佳津子の手紙で閑照が文科乙類三組をやる（独逸語、古典）と。彼を学者になる方針で行かしたるのは如何かと大いに疑問を抱く。自分が居なかつたのは彼の為に不幸かとも思ふ。彼は一寸複雑で渋味あり、親の自分にも未だ分らぬ所があるが若し小生に似た性格と頭脳をもつて居るとすれば純粹なる学者には不向である。多少異色のある行政家にでもするのが最もよいのかも知れぬと思ふ」（同年六月九日）という。「三月廿三日附の佳津子よりの手紙来る。閑照が一高に這入つた通知である。嬉しいかどうかわけが分らぬとさもありなん。彼は学者になると言つて居る由。これは小生も少し考へさせられる」（同年六月三〇日）とある。

父は、子が「行政家」、すなわち官僚として「国家に奉仕」（前掲、同年三月二三日）することを期待していた。文科乙類とは、ドイツ語を第一外国語にするコースであるが、父親として帝大での法学部受験につながる英語を主とする甲類に進むことを望んでおり、意向と異なつていたのである。閑照は、一九四三年に入学するが、文科第一学年三之組（計四〇名）に属する⁽⁴⁾。クラスでの神中の出身者が閑照を含めて計四人いた⁽⁴⁾。とはいへ、父として子に劳いの言葉をかける優しさがある。ビルマの天瑞は東京駒場の一高の寮に入った閑照に便りを送る。

「二昨日お母さんよりの手紙で、始〔初〕めて寮の番号等が分つた。既に寮生活も慣れたことと思ふ。今は一生に於いて最も貴重なる時期である。友人諸君と仲よく共に切磋琢磨皇国の根幹たるの大成を期すべし。小生も非常に元氣である。一昨日留学生〔前述のモンテトン〕が出發した。色々と言付けもしてある。よい友人となることができると思ふ。この頃は雨季〔五〜一〇月〕で毎日の雨。太陽を見ることは殆どない。御蔭で敵機も来ぬ」（一九四三年日付不詳、天瑞から閑照への葉書、図6）とある。

六 家族のその後

一九四三（昭和一八）年のある日、「閑照より葉書来る。二郎三郎は田舎に行つて居る由。二郎も兵学校の試験に残つて居り相当成績がよいので有望との事」（同年九月二四日）とある。二郎は、将来の幹部将校を目指して海軍兵学校へ入ることになる。「妻からのもの七通に……電報あり。見ると「ジロウ カイヘイニゴウカク」（二郎、海兵に合格）とある。これは又驚くべき快挙。とう／＼小生の留守中に二人の子供は最高最上の学校へ入学した。妻の業績の偉大なるに頭を下げねばならぬ。とう／＼三人の子供中二人は家を出て学校に行く様になった。留守中の大きな成長である」（同年一月二十二日）と喜ぶ。

この後、一九四三年二月一七日に天瑞は、上座仏教僧侶として出家し僧院に籠り、研究生活を続けたため、日記には手紙の来信記録が見られない。なお、同年の秋に、閑照のその後を決める重要な出来事があった。一高の記念祭で、京都帝国大学教授で哲学者の西谷啓治の講演を聞いたことである。

天瑞は、ビルマでの留学が終わり、日本への帰国直前の「夜中三時に起きて家族宛に二通、藤井〔真水〕君に一通手紙を書く。家族へは読売〔新聞社の航空〕機と留学生に託するもの。どうしたのか愈々今帰還せんとするに……オク〔臆〕病風につかれたのか非常に心配である。果して帰還し得るやあやぶむ気持あり。……今帰還し得ざらんか千載の痛恨事とも思へる。愈々帰ると知ると生命が急に惜しくなると聞くが実際である。蓋し死はかねての覚悟である。悔ゆるの要なし。又我が運命については奇蹟的展開を信じるが心にかかることは国家の将来である。半ば遺書のつもりで我が妻我が子に手紙を書く」(一九四四年四月一〇日)とある。

天瑞は、一九四四(昭和一九)年三月一九日に、上座仏教の戒律から還俗して、再び日本の大乘仏教僧侶となり、六月に日本へ戻る。その際に、僧院で学んだことを記録したノート、現地で写した数々の写真とともに、タイとビルマでの滞在を記録した日記を携えてきた。閑照によれば「父が乗った船は、途中で魚雷攻撃を受けずに南方から日本に無事に帰還できた最後の船⁽⁴³⁾という。

閑照は、一九四五(昭和二〇)年三月に一高を卒業するが、戦争激化のため就学期間が二年短縮された。同年春から京都帝国大学文学部に入学するが、召集令状を受けて、四月二日付けで入隊する。属したのは、敗戦末期の本土防衛のため急遽に増設された部隊であった。すなわち、陸軍の第十五方面軍(大阪)に属する第百四十四師団(和歌山)隷下の歩兵第四百十五連隊(通称号・護阪二二三〇五部隊)であった。同連隊の第三挺中隊に配置となり、淡路島の沿岸陣地の防御についた。最下級の陸軍二等兵から入ったが、七月に志願した兵科幹部候補生の採用で一等兵となり、戦争が終わり復員時には上等兵で除隊した。⁽⁴³⁾

敗戦直後、和歌山の高野山成福院で一家は久方ぶりの家族生活を送った。一九四五年には、上田家に四男の修也が生まれている。一九四六(昭和二二)年四月に閑照は京大に復学する。

次男の二郎は入寺して、榎本高明と名乗る。神中を経て海軍兵学校に在籍していたが、敗戦により廃校となった。天瑞の親友に榎本戒言⁽⁴⁴⁾がいた。榎本は兵役を終えてから高野山中学校に学んだので、天瑞とは年が離れていたが親交を結んだ。寺院後継者でその長男である榎本弘明⁽⁴⁵⁾は、

高野山大学から学徒出陣となる。茨城の土浦海軍航空隊に入り、朝鮮の元山海軍航空隊を経て、一九四五年四月に、鹿児島鹿屋飛行場から、海軍神風特別攻撃隊第四・七生隊として出陣して、南西諸島方面（喜界島南方海域）にて二一歳で戦死した。⁽⁴⁴⁾戒言は、悲壮から床に伏す。天瑞は二郎を連れて、徳島県那賀郡福井村（現・阿南市）の神宮寺に赴き、戒言に会わせる。天瑞は、軍隊に志願して生き残った二郎に対して、命令により軍に入って戦没した弘明について、状況を説明する。二郎は全てを案じた。⁽⁴⁵⁾榎本戒言は、枕元での娘と二郎の婚礼の盃を交わす姿を見届けて、そのまま物故した。なお徳島は真言宗が盛んな土地柄であるが、上田閑照の義父（妻上田真而子の父）で、真言宗古義派僧侶の藤本真光は、徳島県板野郡松茂町の出身でもあった。⁽⁴⁶⁾

七 おわりに

昭和前期の上田天瑞と家族をめぐって、長男上田閑照との関係を軸に論じてきた。学問史である本稿の結論として、両者が関係する「宗教」と「言葉」の二点に焦点を当てて論じたい。

(1) 宗教

父の上田天瑞は、高野山真言宗の僧侶であるが、子の上田閑照は、臨濟禪の居士として歩んだ。閑照は、学究生活のなかで、「二十代の終わりから私は禪の道を居士として歩み始めたが、自分では密教から離れるという気持ちでは全くなかった。私の実存感では初めから禪と密教は表裏相通じるものであった⁽⁴⁷⁾」という。つまり真言宗僧侶の子弟ではあるが、参禅をしつつも真言密教から全く遠くならず、禪と密教の調和、そして自己を肯定的に位置付けていたのである。

それは、天瑞が、子の立場を尊重していたからである。実は、天瑞が若いころに様々な宗教や思想に求めた時期があった。元来から説教や演説を好んで聞く趣向があり、東京帝大の在学中は多くの名士の話を聞いた。印象に残っていたのは、本人の記述順に示すと、キリスト教の山室軍平・海老名弾正、真宗大谷派の近角常観、臨濟宗の間宮英宗、曹洞宗の飯田欒隠、哲学者の三宅雪嶺、キリスト教の松村介石、仏教運動家の高島米峰・境野黄洋、政治家の永井柳太郎・中野正剛・永田秀次郎という。とりわけ近角が最も印象に残ると記す。天瑞は、大学近くの本郷に

ある求道会館へ、近角の説教を「度々聴聞に行った。風貌は田舎のオヂさんの如く、声は全くシワガレ声で独特の響があるが、何んとして雄弁家ではない。然しその風貌態度を見、その声を聞くと何とも言えぬ有難味がある」と評する。⁽⁴⁸⁾後年の天瑞が、生涯で聞いた話のなかで「一番有難い」と思ったのは、個人での対話では金山穆韶であり、一人の聴衆として聞いたのは近角常観の説教だという。金山は、天瑞にとって真言密教の行と学の師であり、高野山真言宗管長と高野山大学学長を歴任した、近現代真言宗の学匠である。近角による他力の説法は、自力の真言僧の心に強く響いたのであった。

そのため天瑞は、子供の宗教観や生き方に口出しをしなかった。長男閑照には、高野山真言宗の僧籍はあったが寺院の後継者になることを強く求めなかったようだ。天瑞自身が六〇歳代半ばとなった頃に、自分にとって子供達とは、「彼等の世界を生きるのである。又それでよい。最後に私と共に残る家族は妻のみであろう、その妻ともやがては別離の日を待たねばならぬ」と記す。⁽⁴⁹⁾子供は、自らの人生を切り開き、その生き方を寛容に理解した。自らもそうであった。戦前戦中の困難なさなか、偏見なく上座仏教に出家した、大乘仏教である日本の僧侶は、他にいるだろうか。

(2) 言葉

「真言」と書き、「真実の言葉」という。真言宗僧侶である父と、少年時代の長男は、互いに離れていたので交わす言葉が限られていた。その場面が少なかつたとはいえ、父と子の人生には、共通するものがある。

上田閑照による研究のキーワードの一つは、「言葉」である。本論で述べたように成長過程から、その感覚が鋭角化されていった。横浜から高野山、そして再び横浜に戻ったときに子供同士が話す言葉が通じなかつたこと。また、横浜第一中学校の授業では、国語の犬養孝と英語の小宅歓一、漢文の長野正義の授業を通して、言葉をめぐる学問の一端を見たことである。また当時の横浜は、海外航路の窓口として、様々な言葉が飛び交う国際都市であった。

上田天瑞は、パリ語仏典から戒律研究をした仏教学者であった。釈尊の言葉と云うべき聖典を探求して、『国訳一切経』や『南伝大藏経』の翻訳を手掛けた。父は、子に官僚になることを期待していたが、閑照は父の学問への探求する姿勢を幼いころから見てきたこともあり、学者

を志す。天瑞が全身全霊を注いでパリ語を修得する姿勢に、閑照は「言語」に意義を見出したのではないか。パリ語の父とドイツ語の子は、それぞれで学び究めていった。

天瑞は、高野山大学学長を経て、定年退職を待たずに辞職する。学問を辞めたわけではない。それには理由があった。厚生省（現・厚生労働省）の派遣でビルマでの遺骨収集に関わり、多くの戦死者の骨がビルマの山野に残ることに衝撃を受けたからである。祖国の地を踏まずビルマで亡くなった日本軍将兵へ供養に専念することを決断する。宗教活動に力点を据えたのは、他でもない。「言葉」を発せられない無言の彼らの声を掬い取ることであった。

本論冒頭の一節を繰り返す。「父は一年中ほとんどいなかたわけだが、不思議に、淋しいとは思わなかつた⁽⁵⁰⁾。子の少年時代には、父と交わす場面が限られていたが、それぞれの人生は「言葉」で繋がった、豊かな親子関係にあったのである。

註

(1) 上田閑照「生い立ちの記」〔哲学コレクションV 道程——思索の風景〕岩波現代文庫学術一八三、岩波書店、二〇〇八年）、二六七頁。

(2) 本論の執筆にあたっては、上田天瑞令孫・閑照令甥の楳本慈弘師（徳島県阿南市福井町・神宮寺住職）、天瑞弟子の仲下瑞法師（和歌山県伊都郡高野町・成福院住職）より御理解を頂き、本論で引用した上田天瑞のビルマ日記の閲覧については、上田閑照門下生の秋富克哉氏（京都市芸繊維大学教授）及び岩田文昭氏（大阪教育大学教授）から仲介の協力を頂いた。名位には記して御礼を申し上げる。

なお、本論に関係する筆者の先行研究として、拙著『戦時下の日本仏教と南方地域』（法藏館、二〇一五年）の第Ⅱ部第二章「ビルマ進攻作戦と仏教宣撫工作」、拙稿「仏教学者の上田天瑞と陸軍中将の幸田口廉也——インパール作戦の開始前後における会見」（林

行夫編『日本と東南アジアの仏教交流——その史実と展望』龍谷大学叢書四二、三人社、二〇二二年）。

(3) 上田天瑞『南方仏教修学記——戒律と教団生活の実際』（高野山出版社、一九五〇年）、同『ビルマ戦跡巡礼記——自由と平和への道』（ビルマ親善協会、一九五七年）。

(4) 主に参照したのは、上田閑照「生い立ちの記」、「生死去来」（前掲、『哲学コレクションV 道程——思索の風景』）。他の論考では、断片的に家族のことに触れるが省略する。

(5) 東京帝国大学生時代の集合写真の人物特定に際しては、一色大悟氏（京都大学人と社会の未来研究院）の協力を得た。記して御礼を申し上げる。

(6) 前掲、上田閑照「生い立ちの記」、二六〇頁。

(7) 前掲、上田閑照「生い立ちの記」、二六〇頁。

(8) 三河島町小学校校国史地理研究部編『三河島町の過去と現在』（三

- 河島町小学校国史地理研究部、一九二九年)、九〇一〇頁。
- (9) 前掲、『三河島町の過去と現在』、一二一―一三頁。
- (10) 東京帝国大学編『東京帝国大学一覽——従大正十五年至昭和二年』(東京帝国大学、一九二七年)、五三〇頁。
- (11) 高野山真言宗芳盛寺の現住所は、神奈川県平塚市土屋三二六三番地。同寺の歴史は、境内地に設置する案内板を参照した。
- (12) 上田閑照「生い立ちの記」、二六二頁。
- (13) 高野山真言宗真福寺の現住所は、神奈川県横浜市市中区本牧三之谷五〇番地一。
- (14) 上田閑照「生い立ちの記」、二六一頁。
- (15) 横浜市編『横浜市史稿 仏寺編』(横浜市、一九三二年)、三六一―三六五頁。なお藤井真水は、バンコク日本人納骨堂の初代管理僧であるが、戦後には上田天瑞が住職を務めた真福寺の本寺にあたる増徳院の住職に、藤井を推薦したという(藤井真水『仏陀の再現』仏道蘇生同志会、一九七三年、八九頁)。
- (16) 上田閑照「生い立ちの記」、二六三頁。
- (17) 創立五〇周年記念誌編集委員会編『まかど——新校舎落成・創立五十周年記念誌』(横浜市立間門小学校、一九八〇年)、二八―三一頁。
- (18) 横浜市立根岸小学校編『根岸 創立百周年記念』横浜市立根岸小学校、一九七三年)、巻頭口絵。
- (19) 上田閑照「生い立ちの記」、二六四頁。
- (20) 横浜市立根岸小学校編『創立八十周年記念誌』(同校、一九五三年)、一〇頁。柏は同校に在職のまま一九四五年一〇月に和歌山で没したという。
- (21) 上田閑照「生い立ちの記」、二六六頁。原文は「佐藤欣哉」とあるが佐藤欣也である。佐藤の父清一は、安全自動車株式会社の横浜支店長にあつた。機械類を扱ったため、子供の情操のためカメラを与えたのであろう。佐藤は、慶大法学部を出た後、三井倉庫に入社して、同社常務や三井倉庫港運社長を歴任し、一九九二年に六六歳で没した(横浜貿易新報社編『神奈川県名鑑』横浜貿易新報社、一九三五年、一七九頁。横浜商工連合調査会編『横浜会社要覧——附録・横浜組合名鑑 昭和十五版』村松博生堂、一九四〇年、一三七頁。武内重雄編『人事興信録 第三十六版 上』人事興信社、一九九一年、さ五〇頁)。
- (22) 「校報」(『桜蔭会報』第一八号、神奈川県立横浜第一中学校、一九三八年二月)、六頁。「学校日誌」(犬養孝編『桜蔭』第五九号、神奈川県立横浜第一中学校校友会、一九四〇年二月)、五三頁。
- (23) 上田閑照「生い立ちの記」、二七〇頁。
- (24) 犬養孝「桜ヶ丘を思いつつ」(創立八十周年記念事業委員会編『神中・神高・希望ヶ丘高八十周年記念誌』神奈川県立希望ヶ丘高等学校、一九七七年)、一一〇頁。
- (25) 上田閑照「生い立ちの記」、二七一頁。「青ちゃん」こと長野正義は、横浜出身で、広島高等師範学校(現・広島大学)を経て、神奈川県教員となり、横須賀市教育長を経て、同市長となり米海軍基地を抱える自治体の首長として革新市政を行った。祖父は薩摩藩士から時宗僧侶となった長野良淳という(長野正義『市長随感』私家版、一九七三年、奥付。長野正義『横浜・横須賀六十年——私の歩んできた道』秋山書房、一九八六年、一五頁)。
- (26) 上田閑照「生い立ちの記」、二七一頁。
- (27) 前掲、『神中・神高・希望ヶ丘高八十周年記念誌』。「旧職員名簿」(神奈川県立希望ヶ丘高等学校百周年実行委員会編纂局編『神

中・神高・希望ヶ丘高校百年史 資料編』神奈川県立希望ヶ丘高等学校創立百周年記念事業合同実行委員会、一九九八年）、九〇九～九一九頁。

(28) 桜蔭会高二・高三・高四有志編『吉原洲三先生(スターリン)の化学 復刻・追悼版』(桜蔭会、二〇〇五年)。

(29) 旧制の京都府立京都第一中学校の跡地には、現在は京都市立近衛中学校が所在する。戦後の学制改革を経て、府立洛北高等学校として別の場所に移転して現在に至る。

(30) 小宅敏一「翻訳と時代」(『会誌』第三二号、京都府立京都第一中学校校友会・同窓会、一九二〇年七月)、一〇～一七頁。京一中洛北高校同窓会事務局所蔵。

(31) 校史編集委員会編『京一中洛北高校百年史』(京一中一〇〇周年洛北高校二〇周年記念事業委員会、一九七二年)、二〇一～二〇二頁。

(32) 「帝国大学卒業生」(安藤嶺丸編『曹洞宗名鑑』壬子出版社、一九一六年)、二五頁。二十年史編集委員会編『駒場東邦二十年史』(駒場東邦中・高等学校、一九七七年)、一〇二頁。

(33) 上田閑照「なぐられた話」(前掲、『哲学コレクション』V 道程——思索の風景)、二九二頁。

(34) 毎日新聞横浜支局編『わが母校わが友——厚木高・小田原高・県立川崎高・平沼高・希望ヶ丘高』(毎日新聞横浜支局、一九七六年)、二六五頁。

(35) 前掲、『神中・神高・希望ヶ丘高八十周年記念誌』、二八九頁。

(36) 前掲、拙稿「仏教学者の上田天瑞と陸軍中將の牟田口廉也——インパール作戦の開始前後における会見」。

(37) 岩田文昭「弔辞・スピーチ」(上田閑照先生お別れの会実行委員

会協力『上田閑照先生お別れの会——弔辞・スピーチ篇(付録 計報・追悼記事)』私家版、二〇一九年)、一五頁。

(38) 上田天瑞「現代密教の安心 十(完)——Ⅶ 余録 我が信仰体験」(『高野山時報』第一九三六号、高野山出版社、一九七一年三月)、三頁。

(39) 前掲、上田天瑞『ベルマ戦跡巡礼記——自由と平和への道』、一二五頁。藤原聡・篠原啓一・西出勇志『アジア戦時留學生——「トージョー」が招いた若者たちの半世紀』(共同通信社、一九九六年)、二九四頁。

(40) 閑照が在籍した第一高等学校の文科第一学年三之組での同級生には、中国文学者の伊藤漱平、漢文学者の新田大作、ドイツ文学者の内垣啓一、経済史学者の北条功、裁判長官の沖野威、大蔵事務次官の松下康雄、朝日新聞記者の岸薫夫、ハイデガーの翻訳がある田中加夫などがいた(第一高等学校編『第一高等学校一覽——自昭和十八年至昭和十九年』第一高等学校、一九四四年、一〇六頁)。閑照にとつて、新田は、「特別な意味を持つ存在」(前掲、「生死去来」、三二五頁)という。

(41) 閑照と共に神中から一高に進学した四名のうち、親友の瀬戸口直道がいた。瀬戸口は、東大法学部を出た後、日本勧業銀行(後・第一勧業銀行、現・みずほ銀行)に入り、ロンドン支店長や取締役、井関農機副会長を歴任した(武内重雄編『人事興信録 第三十六版 上』人事興信社、一九九一年、せ一〇頁)。

(42) 前掲、上田閑照「生い立ちの記」、二七三頁。

(43) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C15010690300「昭和20. 8～11 中部軍復員に関する綴」(防衛省防衛研究所)、画像2 枚目。JACAR Ref. C15010690300「昭和20. 8～11 中部軍復員

に関する綴」(防衛省防衛研究所)、画像二枚目。請求番号・平12文部00223100、「[件名番号:037] 配置換 上田閑照(京都大学)」(国立公文書館蔵)。

(44) 海軍飛行予備学生第十四期会編『あ、同期の桜——かえらざる青春の手記』(毎日新聞社、一九六六年)に、榎本弘明の遺稿が掲載される。「生の流れは とどまらず／死は ひたすらに 追いつがる／あわれ 己れも 人の身も／眠りの 床は あとやさき／昨日の人を かなしめば／明日の 人に かなしまる／かくて 世は すぎ 世はうつる／時の流れの とまらねば」(一四七頁)。

(45) 榎本高明「回想 入寺前後のこと」(『写経人』第四号、写経人社(徳島県阿南市梅谷寺内)、一九九〇年一月)。

(46) 徳島県松野郡松茂町誌編纂委員会編『松茂町誌 中巻』(松茂町誌編纂室、一九七六年)、四一二頁。藤本真光(一八八五〜一九四二)は、松茂町に生まれ(俗名・惣吉)、得度した後に、高野山中

学・大学、東京帝大の文科・法科に学び、仏教連合会委員として僧侶の参政権運動に関わり、欧米への宗教事情の調査に教団から派遣される。高野山大学学監、金剛峯寺庶務部長、合同真言宗教学部長のほか、高野町長を歴任した。藤本が住職を務めた高野山遍照光院での様子は、上田真而子『幼い日への旅』(福音館書店、一九九四年)で紹介する。藤本の遷化後の遍照光院は、学僧の酒井真典が住職となる。

(47) 上田閑照「後語 実存と虚存、そして genius loci」(『上田閑照集 第九巻 虚空／世界』(岩波書店、二〇〇二年)、三四一頁)。

(48) 前掲、上田天瑞「現代密教の安心 十(完)——Ⅶ 余録 我が信仰体験」、二二頁。

(49) 上田天瑞「私の年賀状」(『高野山時報』第一七六号、一九六六年二月)、五頁。

(50) 前掲、上田閑照「生い立ちの記」、二六七頁。